１月学習会のご案内

平成２５年１月１０日

メタ認知的活動。

平成２５年がやって来ました！今年もどうぞよろしくお願いいたします。「小学校の国語を語る会」ももうすぐ２００回です。左上のカウントがじわじわと増えていくのを確認しながら，毎号書かせていただいています。

さて，国語を語る会でよく耳にする「メタ認知」という言葉について話題にしたいと思います。「メタ認知」とは何を，どのように身に付けたのかを自覚し，そして意図的に使うために必要な高次の認知のことです。例えば「筆者は〇〇ということが言いたいので，身近なものから複雑なものへという順序による論理的展開を行っている。だから僕も事例を並べるときにはこのように順序性を考えれば伝えたいことが伝えられるのだ」と考えることです。ゆえに，メタ認知についての研究を進めることは，子どもたちが自分の意志と判断によって学習に積極的にかかわる自律的な学習者になることにつながる，と信じて疑いませんでした。

しかし，「【内なる目】としてのメタ認知」という本で広島大学の難波博孝先生（「国語教育とメタ認知」P192～至文堂）がこのように書かれていました。「小学校 4 年生くらいから，学習者は教師の発問に対して手をだんだん挙げなくなり教師の指名を受けての発言が多くなる。発言内容も自分の考えを十分に述べたものではなく，『人の目を気にした』内容になっていく。まさにメタ認知が働いた，メタ認知的活動に制御された言語活動が繰り広げられるのである。」「このメタ認知的活動は、自分の考えや意見，思いを相手によりよく伝えようとして働いているのではなく，それらを覆い隠そうとする方向で働いている。」……ということなのだそうです。なるほど！これもまた確かに学校によくありがちな光景であると言えます。つまり教科の学習で身に付けたものが働くだけではなく，その他の人間関係や場意識などなど，様々な要因によってメタ認知的活動は行われるのだと考えられます。そのような発想に立って考えたことがなかった私にとって「目から鱗」でした。「メタ認知」を狭く考えすぎていたんだと反省しました。授業中，子どもはいろいろ考えて行動しているんだなあ……。

もちろんこれが授業としてよい姿であるとは，もちろん難波先生は書いておられません。学校の先生はこのような言語活動にならないように支援していかねばなりませんし，当然，子どもたちの行き着く先は「自律的な学習者」でなくてはならないでしょう。教科の授業において「メタ認知」を成立させるためには，教科で培いたいものを描いているだけではだめで，子どもの心情にもっともっと寄り添わなくてはならないのだな……とつくづく感じてしまいました。

日　時　　平成２５年１月１９日（土）９：３０～１２：００（通常モードです！）
場　所　　岡山大学教育学部附属小学校　２階　会議室
　　TEL(086)272-0511　　FAX(086)271-3455
連絡先　　小野　桂（おの　けい）TEL090-7970-4197　odorurenkon418@docomo.ne.jp
　　keikeioh@fuzoku.okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
内　容　　子どもの学び合いを大切にした授業づくり　「三つのお願い」（４年　光村図書）
　　レポーター　小出真規（岡山大学教育学部附属小学校）

＜お知らせ＞
「おもしろ見つけ」の本を，附属小でお取り扱いしております！来られる前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。（特価！）多くの方に手にとっていただけるように，みなさん！宣伝活動をがんばりましょう！

12月の学習会の報告 （文責　近藤昌子）

　１２月の語る会は，５年生の説明文「天気を予想する」を子どもがどう直観したらよいか，そしてどう勉強していくかについて話し合われました。

田中先生より

〇中学校の教科書を検討する会と一貫教育に通じる話題
・今日の授業が昨日，明日のつながりのイメージをもつようにしていきたい。
・力をつける道筋は必ずしも全員が同じではない。
　ステップを全員に踏ませないといけないと，とらわれすぎてはならない。
　大きな道筋は構想として大切。指導の方式はいろんなバリエーションが考えられることも大切。

小川先生より

〇校長会の話題より
・持続可能な社会の実現には多様性，交流性が必要。おもしろ見つけに位置付く。
〇御野小での名人カードから
・ろうか，あいさつ，そうじ，後片付けの４つについての名人カード
　→１５こ〇がぬれたら校長室にシールをもらいに行く。
・対応の仕方
「校長先生はどこにシールをはればいいのですか」→子どもに説明させる。
「今度はどこが名人になれそうですか」→子どもがどう取り組んでいるか意識させる。
　→意識させる繰り返し。①何をどうやって意識付けるか②どう方向付けるかが大切。
・おもしろ見つけでは
　まとめの仕方…形式ではなく，反応を大切にするなら反応をまとめさせればよい。
　場面わけの仕方…反応を高める部分をどこで想定するかで変わる。
　　何を身に付けさせたいか，何を高め，どう意識させるのかという哲学をもつこと。
　子どもは「分かったレベル」ではなく「分かりきって」初めて力がつく。
　家での宿題，復習のさせ方と授業とのつながりも必要。

田中先生より

〇大学の教育技術総合演習より
・板書の技術や機能についての演習　機能の一つに「書写的機能」。
　板書を書く先生の字が子どもの文字のイメージへ影響するといわれる。
・字をうまく書きたいと思う子→練習を重ねるとずっと伸びない子が突然うまくなる。
　字がうまくなりたいと意識しない子→突然うまくはならない。
　子どもの意識に目標性の観点をもち，蓄積されたときにぐっと上手になる。

＜今回の話し合いについて＞
　前回，直観を導くものとして「題名」「問い」「まとめ（括）の部分」「キーワード」にまとまった。今回は「第１段落の扱い」を含めて，どんな直観をもつと想定し，授業でどう追求していくかについて，主に第２学習場面（②～③または④段落）を対象に話し合った。

話し合いの結果

グループ１

〇直観からめあてへ

・「まとめの部分」から「人間はすごい」と目を向ける。
　その前の部分からも「すごい」と言ってくると予想される。
　→「すごいところを見つけよう」というめあてをもち，１，３場面はそれに沿って検証。
　　２場面は「すごいところよりも大変そう」というところを確かめる。
　　最後に問いと答えにも対応できる。
〇文章構成や要旨に関わらせるために
・「最後はこの写真でよいのか」「１，２段落はいるのか」という問いかけ
　→文章構成に対応。
・第３次で要旨をまとめる
　→最後の部分にある筆者の人間のすばらしさへの考えが書けるのではないか。

グループ2

〇まとめからめあてへ
・題名…直観はもちにくい。
　小さな問い…答えを探すおもしろみがない。
　まとめ…人が天気にどのように関わっていくのか？
　→３，４年で段落構成の学習をしているため，最後が内容のまとめと分かる。
　　筆者の意図につないでいく直観がもてるとよい。
〇別のアプローチとして
・挿し絵の図や表を並べると最後が違う所から疑問をもち追求可能では。
・問いと答え，はじめ・中・おわりは身についていると考える。
　→はじめがない構成をとらえ，全体を統括する問いを作らせる。
　→題名に目が向く。
　→問題作りを通して全体に目が向く。
　　⑩を読むと，判断して行動するところまで伝えようとしている。「何のために」までおさえたい。

グループ3

〇「全体の問いをどのように作っていくか」「論理のよさをどうつかませていくか」の二つを考えた直観のもたせ方とめあて
・内容のおもしろさをつかませて書きぶりの効果を確かめる。
　→題名の「予想」と「予報」の違いから全文を読む。
　　「科学はすごい」「最後は人か」「問いと答え」などと自分に引きつけて読むと考えられる。
・「３つの問いについて一つずつ読んでいこう」という全体の問いをもたせた場合
　構造的な形の問いの並べ方「なぜこんな書き方にしたのか」，筆者の論理のよさ「どうして最後にこのような活をもってきたのか」に進めていく。

グループ4

〇小さな問いと答えから追求へ
・題からは直観はもたせにくい。
　しかし「予想するとは？」といった大きなめあてを立てることは可能。
・小さな問いには気付きやすい。
　答えをまとめていく中で，身近なところから宇宙へと視野の広がりをもたせた書きぶりに気付かせる。
　→子どもが見つける事実を板書の工夫を通してつながりを位置付ける。→進歩してきたすばらしさに気付かせる。

・⑩をメインに扱えるクラスなら「科学の便利さ」への直観を確かめる。
　前半の技術の便利さと後半の人の経験の大切さ
　→便利さとは何か個々の人のよさとは何かをつないで考える。

グループ５

〇説明文の切り口
・説明文は物語と違い，切り口で読む必要…「題名」「第１段落」「まとめ」
　第１段落＝読み手と筆者の問いとを一致させるとても大事な段落
　　→図と文章とを比べて「的中率が上がっている」などと読んでみたいという思いをもつ。
　　「人間はどのように的中率を上げたのか」という問いに教師が組み替える。
　題名とまとめ…「『人間が』天気を予想するとはどういうことか」と考えるとまとめが変わる。
　　→人間が天気を予想する楽しさを書いている話
　　→１段落を人間が的中率を高めた話として読む
　　科学技術の向上の事実とまとめの一致，国境を越える協力
　　教師が返すときに「人間が」をはめていくことで，人間の努力，先人の知恵を感じられる。
　科学，自然のすばらしさを読む子どもが育つ…南極に行って命と天気の関わりを実感している人だからこその文章

小川先生

〇直観へのアプローチ
・文学　　全体的情意的直観…形象をつなぎ合わせる
　説明文　全体的知的直観→４つのアプローチ　①題　②第１段落　③問いと答え　④まとめ
・「人間が天気を予想する営み」をどう直観していくか
　「やっぱり人間」の中身をどう充実させて読むかがカギ
・第１段落の重要性＝書き手が問いに行き着くまでの過程を読者と共有
　　人間の営みを直観させる
〇反応を位置付けて読む
・第２段落　的中率が高くなった営みを読む
　　→子どもが反応する場所
　　ハート：これとこれだから上がるんだ！＝つなぎ反応が生まれる
　　ハート：一つ一つの事実＝事実反応
　　ハート：描写（低学年に多い）＝様子反応
　　地上，海洋観測とスーパーコンピューターでの伝達（事実）とまとめになる仕組みのすばらしさをつないで語る子ども＝事実とまとめの部分をつなぐよさを位置付ける
　第３段落　技術だけでなく協力，共有で力を合わせる＝段落同士のつなぎ反応
　　前段落とつなぐか別に扱うかはクラスで違う。

・情意反応は人間の具体的な行動を促す。
　つなぎ反応，事実反応，様子反応→情意面（協力ってすごい！人間はかしこい！）→行動を起こす

勉強会では，説明的文章の特徴からどういう全体的知的直観が生まれるのか，文学と距離を置いて極めていきたい。

田中先生

〇文章の構造について

・問題提起　事実の報告から生まれる
　事実の報告→読者「本当か？」→表の提示（確かめ）→問題提起…共感をもって読める
・「天気を予想する」の特徴
①事実の報告と問題提起　②③解答　④問題提起　⑤⑥解答　→ここまでが⑦に対する事実の報告
①～⑥事実の報告　⑦新たな問題提起　⑧⑨答え（筆者の考え）　⑩まとめ
長い事実の報告があり，⑦の中核的な問い⑧⑨で筆者の考えを示し⑩でまとめる尾括文
問題としては，⑦の問題提起に対して論理的な理由でなく経験的な結果しか示されない。
・問いと答えが身についているクラス
　→３つの問いの中心的な問いはどれか…問いの違いの認識。
・題名読みで入る流れ
　「天気を予想する」は用言で終わる。
　→だれが，いつ，どこで，何を，どのように，何のために
　　の要素が出てくると予想することで，読みの構えをもつ。
　→通読して中心的な問いをとらえる。
　→段落ごと分析　本当かどうか図や表を使って確かめる。
　→最後まで読んだ後，批判的に読む
　　筆者の写真の事例…この空でみんな同じように予想できるのか？
　　予報士と読者のレベルは違っても読者が関心をもつように求められている。
自分の変化（読んでプラスになった，もっと勉強したい等）に共感できる授業構想